

21世紀型能力を「学校を基盤とするカリキュラム開発」で育む

大阪教育大学 木原俊行

1. 21世紀型能力とその育成方針

今、21世紀型能力とその育成に関する提案が人々の耳目を集めている。それは、ATCS21（21世紀型スキルの学びと評価）プロジェクトが発足し、企画・運営され、その議論が公開されて、急激に熱を帯びた。このプロジェクトでは、21世紀の社会状況を見据えて、そこで高度な問題解決と対人コミュニケーションを繰り広げる人材に求められる能力、それを育成・評価するための方法論が総合的に議論されている。ⁱ

ATCS21プロジェクトでは、21世紀型スキルが、右表のような枠組みで示されている。

一見して、それが多様な要素から成るものであることを理解できよう。そして、同時に、10のスキルのうち、その筆頭に「思考の方法」の「創造性とイノベーション」が位置付けられていることに、注目すべきであろう。

我が国においても、国立教育政策研究所が「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」と題する研究報告書の中で、「21世紀型能力」とその育成に関する提案をおこなっている。ⁱⁱ同報告書では、「21世紀型能力」は、「思考力」を中核として、それを支える「基礎力」、その使い方を方向づける「実践力」という三層構造をもつものであると理解されている。この知見が呈されるまでに、同研究所のプロジェクト研究「教育課程に関する基礎的研究」のチームは、社会の変化についての分析、世界の教育動向の把握、教育・学習研究の成果の整理等をおこない、社会の変化に対応する資質や能力を、多面的に、また緻密に検討している。それゆえ、主張されている「21世紀型能力」の必要性や内容は、十分な説得力をもっている。そして、同報告書では、21世紀型能力の中核に、思考力を位置づけることが提案されている。それは、「一人ひとりが自ら判断し自分の考えを持って他者と話し合い、考えを比較吟味して統合し、新しい知識を創り出し、さらに次の問いを身につける力」と定義されている。

このように、「21世紀型能力」は、多様な要素から構成される総合的な能力と理解する

21世紀型スキル

思考の方法

1. 創造性とイノベーション
2. 批判的思考, 問題解決, 意思決定
3. 学び方の学習, メタ認知

働く方法

4. コミュニケーション
5. コラボレーション (チームワーク)

働くためのツール

6. 情報リテラシー
7. ICTリテラシー

世界の中で生きる

8. 地域とグローバルのよい市民であること
9. 人生とキャリア発達
10. 個人の責任と社会的責任 (異文化理解と異文化適応能力を含む)

のが通例であろう。そして、その支柱に、創造的な思考が位置づくことも、衆目の一致するところであろう。それでは、創造的な思考を繰り広げる能力を子どもたちにどのように育成していくべきなのであるか。

2. 思考力をキーワードとするクロスカリキュラアプローチの適用

「思考力」を育むための授業は、いわゆる「活用型授業」と接点を多くもつ。筆者は、それは、次のような前提条件が満たされて初めて成立すると考える。ⁱⁱⁱ

- ①多様な解が認められる学習内容の提供
- ②思考・判断や表現をさせるための時間の捻出
- ③思考・判断や表現の視点やモデルの提供
- ④資料や道具の量的・質的充実
- ⑤学習形態の多様化

その上で、筆者は、全国の小中学校における活用型授業の事例を分析して、思考力の育成を標榜する授業には次のような4つのタイプが存在することを明らかにしている。それらは、1) 活動的、2) 応用的、3) 発展的、4) プロジェクト的な授業づくりである。

まず、1)「活動的」な活用型授業は、「観察・実験やレポートの作成、論述」などの学習活動を盛り込んだ授業である。学習活動のレパートリーが豊富な授業と言ってもよい。

次いで、2)「応用的」というのは、習得した知識をより複雑な状況に適用する場合を意味する。例えば、子どもたちが、算数で図形の面積の求め方を習った後に、それをより複雑な形の求積に適用する場合、国語である文学作品を鑑賞し、読解のポイントを似たような作品の鑑賞に適用する場合等が、このタイプの活用型授業に位置づこう。

3)「発展的」なものは、教科書等を利用して習得した知識を子どもが自身の生活や社会の今にあてはめてみる場合だ。例えば、社会科で裁判員制度を学習した後に、自分が裁判員になったら、ある事件が起こった際にどのように判断するかをシミュレーションするといった展開である。

4)「プロジェクト的」というのは、習得した知識や技能を子どもたちがものづくりやイベントの企画・運営に活かす展開である。例えば、子どもが国語科で動物に関する説明文を読解した後に、その構成や表現を利用して、オリジナルの動物図鑑を作成し、図書室に配架する課題に挑むといったケースがこれに相当しよう。

21世紀型能力を育む教育課程には、思考力の育成を図るための多様なタイプの授業を導入するとよろしかろう。「思考力」をキーワードとするクロスカリキュラアプローチを教育課程の編成・実施に適用すると、言い換えられる。そして、それは、上述した事例のように、指導者による教材や題材の開発を伴うと、さらにその性格を強められる。

3. 合科的・総合的な実践の重視

前章で述べた「プロジェクト的」な活用型授業、さらには一部の「発展的」な活用型授

業の推進は、教育課程の編成・実施における合科的・総合的な実践の重視を要請する。

まず、ある教科の授業における学習活動や学習成果が、別の教科において思考力を育むためのすぐれた材料となるケースがある。間接的な合科的アプローチである。例えば、ある中学校では、国語科で子どもが俳句を作り、美術科でそれを題材とする絵を描いていた。この学校では、さらに、技術家庭科で、それらをデジタル作品に仕上げていくという学習活動も重ねられていた。それらのリレーは、子どもたちにとっては、作品制作の意欲を高めるとともに、それに必要とされるアイデアを増やすことに役立っていた。

さらに、筆者は、ある中学校で、写真1のような授業を見学した。これは、美術科の授業で仕上げたデザイン画をモチーフにして、国語科の授業で子どもがスピーチを繰り広げている様子である。自らが描いた作品であるから、子どもは、その特徴や制作上の工夫について、たくさんの経験知を有している。それゆえに、スピーチの内容や構成を考えるための材料を豊富に持っていた。

続いて直接的な合科的アプローチである。写真2は、ある中学校におけるチーム・ティーチングの様子を表すものである。社会科と外国語科（英語）の教師の協力教授である。この授業は、当該中学校が交流活動を推進している米国の中学校の友人に日本の震災マップを作成して送るという、プロジェクト的な学習の一環として計画・実施されているものであった。この授業では、ある子どもたちは、自然災害の分布を地図に表し、別の子どもたちは、その英訳に勤しんでいた。それぞれの子どもが、自身の興味や学習スタイルに照らして、活動を選択し、より適切な表現を求めて熟慮していた。そうした文脈は、子どもたちが英語で表した日本の自然災害地図が、貴重な情報を有する、しかも見やすく分かりやすいものになるという成果をもたらしていた。

さらに、教科と総合的な学習の時間を連結させるアプローチも構想しうる。総合的な学習の目標や指導法は、21世紀型能力の育成に期待されるものとオーバーラップする点が少ない。総合的な学習には、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」という目標が設定されている。これは、先のATCS21プロジェクトによる21世紀型スキルの10の要素の



写真1 美術科で描いたデザインを題材にしてスピーチに着手する子ども



写真2 社会科と外国語科の教師のチーム・ティーチングの様子

かなりの部分をカバーしている。また、総合の学習指導法は、いわゆる「探究」の哲学に基づくものとなるので、それを実現するための「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」のサイクルやそこにおいて重視される「他者との共同」は、21世紀型能力育成の方法論の主張と重なる点が多い。^{iv}例えば、子どもたちに、総合的な学習の時間に体験させたことを題材として、国語科の作文活動に従事させ、その構成や表現を吟味しやすい状況を作る、社会科（第5学年）の産業学習で「未来の車」について調査をさせ、図画工作科でその結果を活かした模型を制作させるなど、教科と総合の学びを統合する授業デザインは、子どもたちが自らの思考を発展させるための状況を提供してくれる。

4. 学校を基盤とするカリキュラム開発とそのネットワーク化

このように、21世紀型能力を育む授業、そのもととなる教育課程にはかなりのレパートリーがある。その原則はいくつか確認されるが、^vそれが満たされた、「21世紀型能力」志向の授業と教育課程は、教室、学校の数だけ存在すると言っても過言ではなかろう。教師たちには、目の前の子どもたちの思考力等を高めるためには、教室・学校の条件を踏まえて、どのようなアプローチを採用すべきか、それをいかにして具体化したり、発展させたりするのか——これらの問いに主体的に向き合うことが求められよう。すなわち、21世紀型能力を育む教育課程の編成・実施は、学校を基盤とするカリキュラム開発を企画・運営する、教師たちの授業力量に依存している。

それでは、学校を基盤とするカリキュラム開発という「創造的な思考」を繰り広げる能力を教師たちはどのようにして高めることができるのであろうか。筆者らは、専門的な学習共同体のネットワーク化に、その舞台を求めている。^{vi}すなわち、我が国で伝統的に繰り広げられてきた校内研修、そこにおける授業研究を学校をまたいで繰り広げるという営みである。それは、子どもたちが、他者とのコミュニケーションやコラボレーションを通じて創造的な思考を発展させている姿に酷似しているという意味で、注目に値しよう。

ⁱ Patrick Griffin, Barry McGaw and Esther Care (Eds.)(2012)Assessment and Teaching of 21st Century Skills. Springer, Netherlands. (邦訳:三宅なほみ(監訳)益川弘和・望月俊男(編訳)(2014)『21世紀型スキルー学びと評価の新たなかたちー』北大路書房,京都)

ⁱⁱ 国立教育政策研究所のホームページの該当部分

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/Houkokusho-5.pdf> を参照されたい。

ⁱⁱⁱ 木原俊行(2013)『活用型学力を育てる授業づくり』ミネルヴァ書房の第1章「活用型学力の構造とそれを育む授業のデザイン」を参照されたい

^{iv} 例えば、白水始は、注 i の書籍の中で、21世紀型スキルとその育成の新しさ等を解説している(白水始「新たな学びと評価は日本で可能か」、注 i の文献の 205~222 ページ)。それらは、小学校や中学校の学習指導要領の「総合的な学習の時間」の解説中の「第4章指導計画の作成と内容の取扱い」に記載されている内容と合致する点が多い。

^v 21世紀型能力を育むカリキュラムを開発する際のベクトルとして、筆者は、活用型学力の育成という視点から、「重点単元」の設定や前述した「教科と道徳・総合的な学習の時間の連結」を積極的に図る必要性を説いている。さらに、思考力・判断力・表現力の「系統」に注意を払うことやそれを校種をまたいで実現することに挑戦する意義を説いている。詳しくは、注 iii の第7章をご覧ください。

^{vi} 木原俊行・矢野裕俊、森久佳、廣瀬真琴(2013)『学校を基盤とするカリキュラム開発』を推進するリーダー教師のためのハンドブックの開発ーカリキュラム・リーダーシップの概念を基盤としてー』日本カリキュラム学会編『カリキュラム研究』第22号, pp.1-14.